

日本文化人類学会関東地区研究懇談会

特別連続企画

『未知の知をひめた古典』



Margaret Mead



山本 真鳥

第2回

「マーガレット・ミードの敵と味方
—ジェンダーフリー論争に関連して—」

発表者：山本 真鳥

コメンテーター：栗田 博之

馬場 淳

2004年11月13日 (土)

14:00～16:30

(17:00～ 懇親会)

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所棟

3F 大会議室 (303室)

「マーガレット・ミードの敵と味方」：発表者・山本真鳥氏からのメッセージ

初回の田中真砂子氏が、フォーテスに学恩を感じているのでこの発表をお引き受けした、という箇所を読んで、ずいぶん私はスタンスが違うなと思った。サモア研究の一端としてミードに取り組み、彼女の着眼点の鋭さや、ジェンダー研究の先駆者である点など、その実力は認めてはいるものの、彼女の業績をすべて受け入れて師と仰ごうと思ったことは一度もない。ミードのような研究をしたいと思ったことは一度もないのだ。そうした冷めたまなざしは今回の古典に対する取り組みのスローガン「未知の知をひめた古典」という視角とはちょっと違うかもしれない。

しかし、そこから何かを学んで新しい理論を生み出していくために批判的な精読を行う、という通常の古典研究の営為は、ミードには通用しないようにも思う。だいたい、ミードは古典なのだろうか。古典とはある程度既に評価の決まった業績で、「古典を読む」作業に入らなければ、書架の高段に眠っているはずである。しかし、ミードについてみれば、没後 1983 年にデレク・フリーマンの『マーガレット・ミードとサモア』が出版されて以来、「人類学のゴッド・マザー」をめぐる攻防戦は終了していない。この論争は、サモア人のセクシュアリティに関する慣習の問題が焦点だった。さらに最近では、あまりわが業界では知られていないが、ジェンダーフリーの問題を通じてウェブ上には「マーガレット・ミードは完全に否定されている！」といった文字が躍っている。

海外ではいざ知らず、この 2 年余りの間にジェンダーフリー推進派 vs. バックラッシュ保守派の間の戦いは地方自治の現場での教育問題（混合名簿や性教育問題など）として目立つようになってきている。ジェンダーフリー推進派が論拠のひとつとして用いているのがどうやらミードの『3 つの未開社会における性と性格』（邦訳なし）『男性と女性』であり、推進派を突き崩すためにはまずミードを攻撃せよということで、ミード批判のフリーマンの前掲書と最近邦訳の出たドナルド・ブラウンの『ヒューマン・ユニヴァーサルズ』などを保守派はそのまま用いているということらしい。

このように、ミードの研究が没後もアカデミズムの世界をこえて政治の現場で議論されることは、一見彼女のアカデミックな業績の不幸なめぐり合わせに見えるかもしれないが、実は単なる偶然ではないと私は考えている。ミード自身「文化人類学の伝道者」として、さまざまなメディアを通じて一般へと語りかけることを怠らなかった学者であるが、そうした活動の裏には強烈な彼女自身の主張があった。彼女には、敵もいたが味方もいた。論争に巻き込まれることは宿命だったのである。

Margaret Mead (1901-1978) は、フィラデルフィア生まれ。父はペンシルベニア大学で経済学を教えており、極めて教育的な環境に育った。ニューヨークのバーナード大学を経てコロンビア大学大学院にてフランツ・ボアズの指導を受ける。1925 年 8 月より 9 ヶ月間アメリカ領サモア（パゴパゴ島およびマヌア諸島）で、思春期の少女について調査を行う。帰国してまもなく出版した *Coming of Age in Samoa* (1928) がベストセラーとなり、一躍有名となった。帰国後勤務するようになったアメリカ自然史博物館は結局終の棲家となったが、コロンビア大学でも教鞭をとる。その後、ドブー島滞在（再婚したレオ・フォーチュンに同行、彼女自身の出版はなし）、マヌス諸島調査（*Growing-up in New Guinea*, 1930）、セピック流域での調査（*Sex and Temperament in three Primitive Societies*, 1935）を経て、バリ島での調査（*Balinese Character*, 1942—グレゴリー・ベイトソンと共著）を行う。これだけ広範囲に調査研究を行った人類学者は少ない。その他、*Male and Female* (1949) や *And Keep Your Powder Dry* (1942), *Ruth Benedict* (1974), *Blackberry Winter* (1972) などが有名。

今回は、2 つの論争を中心にミードの学問のありようを検討したい。

発表者・山本真鳥氏の自己紹介

1950 年神奈川県生まれ。学部から文化人類学を専攻しているので、かなり視野の狭い特殊な人生を送ってきたのである。文化領域の問題で悩まなくてすむ島の研究を始めたが、海で区切られていることが、必ずしも文化の境界を明示していないことにやがて気づいた。1978 年から東西センター（ハワイ）経由で西サモア（現サモア独立国）にてフィールド調査。1980 年帰国後も、何度も調査に通っているので、既に第 2 の故郷となっている。1981-83 年日本学術振興会奨励研究員。1984 年より法政大学経済学部で文化人類学・経済人類学を担当。1990-92 年、カリフォルニア大学バークレー校人類学部客員研究員。主な業績は以下の通り。

1990 論文'Transformation of exchange valuables in Samoa.'

Man and Culture in Oceania 6: 205-237.

1994a 「反植民地主義のセクシュアリティ」『社会人類学年報』20: 111-130.

1994b 論文'Urbanisation of the chiefly system:

Multiplication and differentiation of titles in Western Samoa.'

The Journal of the Polynesian Society 103(2): 171-202.

1996 (山本泰との共著)

『儀礼としての経済——サモア社会の贈与・権力・セクシュアリティ』弘文堂。

2000 編著『オセアニア史』山川出版社。

主な訳書

1976 (畑中幸子との共訳) マーガレット・ミード著『サモアの思春期』蒼樹書房。

1993 マーシャル・サーリンズ著『歴史の島々』法政大学出版局。

< 第 2 回研究懇談会

「マーガレット・ミードの敵と味方

——ジェンダーフリー論争に関連して」のご案内>

日時：2004 年 11 月 13 日 (土)

14:00~16:30

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化
研究所棟 3F 大会議室 (303 室)

■ 研究懇談会終了後、17:00 より、
山本先生を囲んでの懇親会を予定してい
ます。



< 第 3 回目以降の予定

(取り上げる人類学者、発表者 決定分) >

今年度

第3回(一月頃) ブラウン and after

発表者: 永田脩一

コメンテーター: 青柳真智子

来年度

第4回 ニーダム 発表者: 吉岡政徳

第5回 シュナイダー 発表者: 小川正恭

< 問い合わせ先 >

日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会事務局

〒150-8938 東京都渋谷区広尾 4-3-1

聖心女子大学人間関係研究室 葛野浩昭

TEL 03-3407-5743 FAX 03-3407-5833

関東地区研究懇談会・特別連続企画——未知の知をひめた古典

たとえば、誰もまだ発見していないフロベニウスの思惟、誰も見出して来なかったラドクリフ＝ブラウンの思索とは、今日いかなる読みの博搜をつうじて垣間見えてくる「フロベニウス」や「ラドクリフ＝ブラウン」の姿であり、その著作群であることだろうか。

西暦二〇〇四年のフィールドワーカーとして、人類学の古典と呼ばれるテキストにあらためて真向かうこと。さりとしてここでは、先人の「帝国主義的な」業績の功罪をまたしても現在の高みから、いいかえればポストコロニアルの光学により浮薄に評定する読みなど、むろんわれわれは期待していない。

一九八〇年代以降のモダニティ批判は、なるほど文化人類学／社会人類学の今日にとり避けて通りえぬ里程標のひとつだったかもしれぬ。古典の読みを介した未知の知の発見、未生の思考にむけた跳躍に、ややもすればそれが阻みかねない不自由を、今日の私たちはようやく漠然と気づきはじめているのである。

人文・社会科学系の領域で、学問の古典とそのアクチュアリティとが今日これほどまでにみごとに乖離を来してしまっている分野、それこそ文化人類学なのではなかろうか。

古典への接近を今さらながらに呼びかける本企画で問うのは、それゆえ在りし日の学問への懐旧でもなければ、旧説をめぐる硬直した弁明でもない。ましてやリアリズムの行間に隠蔽された「コロニアル」の余白探しや、「民族誌論」の格好の餌食になりうるような事例のあげつらいでもない。

古典は、糾弾によってでも恩情によってでもなく、まさに生きた同時代の書物として再読されねばならない。単なる「過去の書物」と古典とを分かち唯一の指標とは、おそらく後者の非回収性に求められるからだ。知られるように、たとえレヴィ＝ブリュルがエヴァンズ＝プリチャードに、フォーテスがリーチに徹底批判されたとしても、批判された当の著作をひとがなお執拗に古典と呼びつづけるのは、型どおりの批判によってはそれらを忘却し抹殺しきれぬ知、既存の知では回収不能な未知の知の存在を、ひとが少なからぬ不安や畏れとともに直観しているからである。

人類学的古典の数々にひそむ尋常ならざるフィールド・データの厚みや、おなじく尋常ならざる感性と思考の広がり、原典を素通りした教科書的批判や、原点批判者の批判の受け売りではけっして感知されうるものではない。

かかる趣旨のもと、本企画では、人類学的古典とその著者の学問的営為に長年にわたり対峙し、当の古典にみなぎる思考の全容を知悉する点にかけては余人をもって代えがたい方々に毎回ご報告をいただき、各古典の生産者が尋常ならざるフィールドワーカーとして、あるいは尋常ならざる思惟の達人として、今日の私たちに問いかけずにはいない「未知の知」のありようを探っていくことにしたい。

「古典に還れ」と抹香臭く叫ぶのではなく、ともに「古典に突き進もう」ではないか。

企画：日本文化人類学会関東地区研究懇談会運営委員会

渡邊欣雄・大杉高司・葛野浩昭・真島一郎